

留学報告書

情報文化学科 2年 本間 祐樹

私が留学に行こうと思った理由は、中国の現状を自分の目で見てみたいと思ったからだ。日本では中国について悪いニュースばかりが報道されている。しかしこれは大学の講義と異なっておりどちらの言っていることが正しいのか自分の目で確かめてみたいと思い留学することにした。また、留学することで内向的な自分の性格を少しでも変えたいという思いもあった。

中国に着いて最初に感じたのは言葉の壁だった。中国に着くと、当たり前のことだが周りは中国人ばかりで聞こえてくるのも中国語ばかりだった。聞き取ることがまったくできず、聞き取れるのは、你好や再见といった簡単なあいさつ言葉だけだった。レベルごとに分けるためクラス分けテストが行われた。クラス分けテストの際も、聞き取り問題はまったく聞き取ることができなかった。口述試験も行われたが、簡単な言葉しか聞き取ることができないので、自分の名前と出身国しか答えることができなかった。こんな状態で授業についていけるのかとても不安だったが、クラスメートも自分と同じくらいのレベルなので大丈夫だろうと思っていた。数日後授業が始まった。クラスメートには、韓国・インドネシア・フランス・ロシアなどさまざまな国籍・人種・宗教の人がいた。授業はすべて中国語で行われたため先生の言っていることが聞き取ることができなかった。しかしクラスメートは先生の言っていることを理解し、分からない部分を先生に質問するなど積極的に授業に取り組んでいた。また、中国語はできなくとも皆英語を話すことができるので英語で先生に質問したりクラスメートと意思の疎通をはかっていた。私は両方ともできないので、クラスメートと自分の語学力に差を感じ情けなくなり、授業をうけたくないと思うこともあった。しかし、根気強く授業に出ていると、だんだん聞き取れるようになり、それに比例して授業がだんだん楽しくなっていった。これは、クラスメートや先生の優しさのおかげであると思う。皆は、私が問題を間違えたり答えられなかったとしても決して馬鹿にすることなくあたたかい雰囲気を受け止めてくれた。私が中国語でうまく表現できないのを察して自分自身のことや自分の故郷のことを話してくれたり、日本について質問してくれたりとてもやさしくしてもらった。また、先生方は小テストのどの部分がどのように間違っているのか一人ひとりに教えてくれたり、宿題で多くの人が間違えている問題は授業中わかりやすく解説してもらった。北京師範大学は、教員と学生の距離が近く安心して学習に取り組むことができた。

クラスメートとはだんだん仲良くなり、クラス会を開き一緒にごはん食べに行くほどの仲になりました。また、クラスメートだけではなく師範大学の日本語学科の本科生と交流する機会もあった。週に1回交流会があり互いに勉強を教えあったり雑談などをしていたが、

教えるよりも教えられる方が多かったと思う。



生活面では、師範大学はとても大きく、大学の中には大きいスーパー、食堂、本屋、マクドナルドなどさまざまな店があり食事や生活必需品を調達することができる。しかし、水道は硬水のため飲み水は買わなければならないことやトイレにトイレットペーパーが置いてないので外出の際はトイレットペーパーを持ち歩かなければならないなど日本とは違う習慣があり慣れるのに時間がかかった。料理は、八角や山椒といった日本ではあまり使われない食材を使ったものや油を多く使ったものが多く、これも慣れるのに時間がかかったが慣れると食べるのが楽しみの1つとなった。地下鉄・バス・タクシーといった交通機関はどれも安く利用することができる。12月までは、バスは10円、地下鉄は40円でどこでも行くことができたが、1月から価格が変更となり距離ごとに値段が変わるようになった。しかし、それでもまだ安く利用することができる。例えば地下鉄は140円くらいで北京市内の観光地はどこでも行くことができる。日本では考えられない値段で交通機関を利用できることにとても驚いた。また、中国の交通状況には驚嘆させられた。いつも多くの車が走っていて車同士がぶつかりそうになること、赤信号でも歩行者は平気で渡って来るなどは日常茶飯事でおこっているのに、不思議なことに事故はあまり見かけなかった。



観光の面では、北京には観光地がたくさんあり、万里の長城、天安門・故宮、頤和園、天壇公園などいろいろなところへ行った。日本と違い慣れないことも多くあったが、人生でそうそう経験できないような刺激的な毎日を送ることができた。

師範大学では、毎年12月に留学生のために北京之夜という大きなイベントを行う。これは、それぞれの国や地域の文化を踊りや歌で表現するイベントである。このイベントに、国際情報大学の留学生メンバー3人と日本人会の人たちとともに参加した。留学生なら誰でも出場できるというわけではなく、出場することができるのはオーディションを合格したチーム・人だけである。北京之夜に出場するため2ヶ月間週に3回練習に励んだ。その結果が実り、オーディションに合格しイベントに参加することができた。当日踊った時の楽しさや感動は忘れられないものとなった。すべての演目が終了した後、出演者全員で音楽に合わせて踊ったのだが、皆が楽しそうに踊るのをみて、国籍・人種・宗教の違いはあっても私たちは心をつにすることができるんだなと実感した。留学に来なければ絶対に得ることのできなかった思いであると思う。



日本で報道されている中国の情報は確かに事実である。しかし、私は北京では日本で報道されているような中国人に一度も出会ったことはなかった。日本で報道されている中国が中国のすべてではないということが実際に現地に行くことによってわかった。国籍・人種・宗教は埋めることができるということも北京之夜を通してわかった。また、日本で報道されている中国しか知らなかった自分は、井の中の蛙であったことも痛感させられた。何事も情報だけを鵜呑みにせず、その情報が正しいのか確かめるべきであるというのが今回の留学で得られた教訓であると思う。

最後に、今回留学の機会を与えてくれ支えてくれた国際情報大学・北京師範大学関係者・留学メンバー・両親に感謝したい。今回の留学によって多くの経験をする事ができた。今後は、留学経験が思い出ではなく、経験として残るよう勤めたいと思う。